

特集3 膵癌早期診断のための 腹部超音波検査・ 超音波内視鏡検査の有用性



あしだ れい こ
蘆田 玲子

和歌山県立医科大学
内科学第二講座 准教授

え もり と も や
江守 智哉

和歌山労災病院 消化器内科

きた の ま さ ゆ き
北野 雅之

和歌山県立医科大学
内科学第二講座 教授

要旨

腹部超音波検査 (US) は、初診時に行う低侵襲な検査手法であり、多くの膵癌がこの検査によって早期発見されるきっかけとなる。そのため、USは病院と診療所の連携においても重要な役割を果たし、膵癌診療ガイドラインでもスクリーニング検査として推奨されている。超音波内視鏡検査 (EUS) は、小さな病変の診断に特に有用であり、他の画像診断で膵嚢胞や主膵管の狭窄・拡張、膵実質の萎縮といった間接的な所見が認められた際のさらなる検査として推奨される。最近の技術進歩により、EUSでは造影剤を用いた血流評価が可能となり、診断の質が向上している。EUSを用いた組織採取 (EUS-guided tissue acquisition: EUS-TA) の技術も進化し、穿刺針や組織採取方法が改良されたことで、組織診断の精度が高まっている。一方で、今後の課題としては、腫瘍が10mm未満の場合には偽陰性のリスクがあることや、偶発症としてEUS-TA後におけるneedle tract seeding (NTS) があることは、把握しておかなければならない。

キーワード

膵癌早期診断, 腹部超音波検査 (US), 超音波内視鏡検査 (EUS), EUS-TA